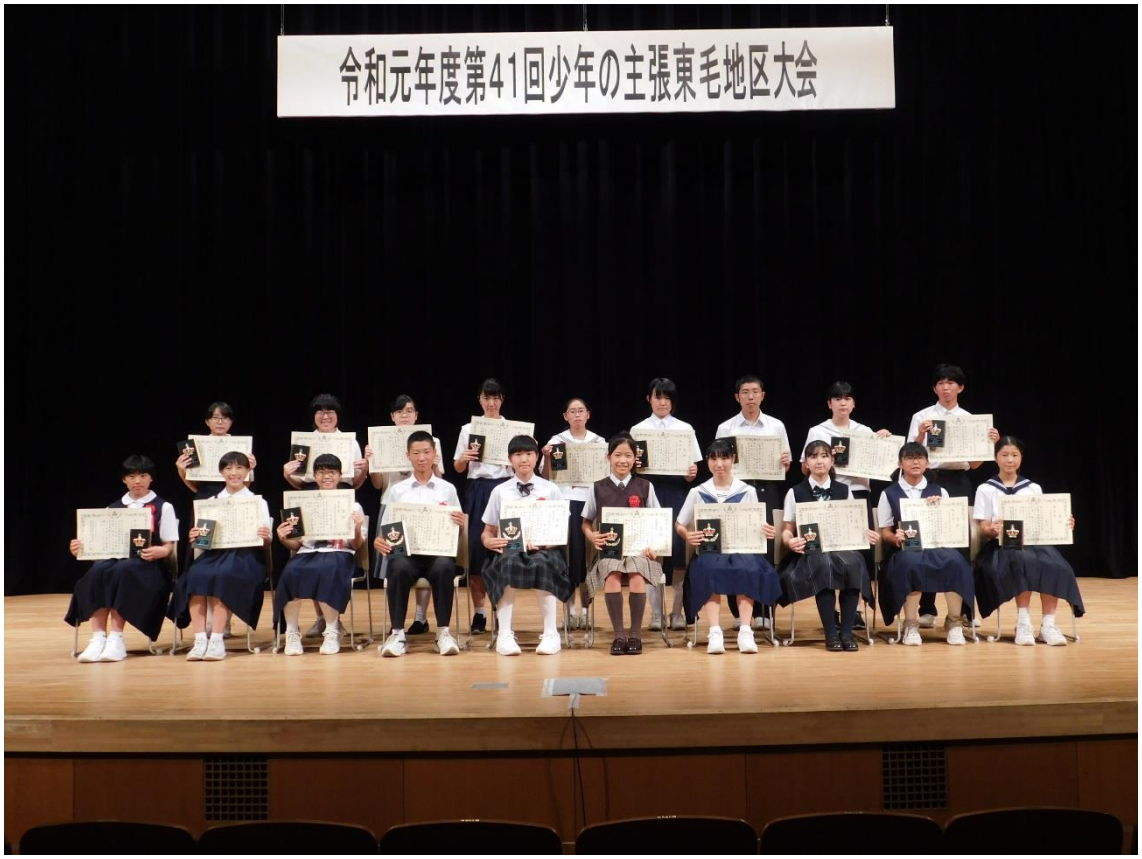
令和元年度
第４１回少年の主張東毛地区大会

令和元年度第４１回少年の主張東毛地区大会が、８月１８日（日）、みどり市笠懸野文化ホール（パル）にて開催されました。

この大会は、中学生が「日頃の生活を通して感じていることや考えていること」を、自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って開催されています。

本大会に出場した１９名の皆さんは、各市町の予選会等を勝ち抜いた代表として、力強く、堂々と発表し、来場者に多くの感銘を与えてくれました。

最優秀賞に選ばれた４名の主張を掲載します。（発表順）



一歩、踏み出す

みどり市立笠懸中学校　三年　阪元　美空

初めて「日本」という社会から一歩踏み出したあの日・あの瞬間。今までの私の狭い考え方から一歩踏み出した瞬間でもありました。

私は中学二年生の夏、みどり市の海外派遣事業に参加し、オーストラリアに行きました。初めての海外で不安を抱えながらも、期待に満ちあふれていました。「オーストラリア人ってきっときれいなんだろうな。背が高くて、目が青くて、フワッフワの金髪で・・・。」私はいつからか、そんな思い込みにとらわれていました。だからこそ、初めてホストファミリーに会った時にはとても驚きました。私がお世話になったホストファミリーはインド系の人だったのです。インド系の人がホストファミリーになると考えてもいなかった私は、動揺を隠しきれませんでした。文化や思考は共感できるのか。そしてなにより、英語を話してくれるのか。そんな不安でいっぱいになりました。しかし、その不安を吹き飛ばすくらいに私のホストファミリーは私に優しくしてくれました。しかも、周りを見渡してみると、オーストラリアには私のイメージとは違う人がたくさんいたのです。むしろ、私が想像していた「オーストラリア人」のほうが少ないくらいでした。

私はこのことについて興味を持ちました。帰国後、日本とオーストラリアの自国籍の人の割合について調べてみました。すると、驚くべき事実が見えてきたのです。日本の日本国籍の人の割合は約九十八パーセントに対し、オーストラリアのオーストラリア国籍の人の割合は約三十九パーセントしかいなかったのです。私は今まで日本から出たことがなく、「日本」という狭い範囲にしか目を向けることができていませんでした。そんな私は日本に住む人は日本人。オーストラリアに住む人はオーストラリア人と勝手に思い込んでいたのです。日本から、自分の世界から外に出ることによって、新たな視野を手に入れることができました。

ところで、みなさんがいつも親しい関係を築いているのは、自分と同じような考えをもった人ですか。それとも、異なった考えをもった人ですか。同じような考えをもった人と一緒にいるのは、話が合うし楽しいと思います。でも私は、自分と違う考えをもった人とも、コミュニケーションをとることで、今まで自分がとらわれていた思い込みに気づくことができたり、視野を広げることができたりすると思います。たくさんの人と出会い、対話する経験を積むことによって、新しい自分自身が発見することができ、自分を見つめ直すことができると思います。また、そうした時間も楽しい時間だと思うのです。そして、広い視野で物事をみて、周りの人と対話することは、より一層自分のことも知ることができるのではないでしょうか。

来年には、東京オリンピック・パラリンピックが開かれ、たくさんの人が日本を訪れることが考えられます。私はそのチャンスを逃さずに、多くの人と積極的にコミュニケーションをとることが大切だと思います。そして、様々な価値観に触れることで、どんな世の中にも活躍できる自分に変われると期待しています。私たちが生きるこれからの時代。人工知能、ＡＩが普及し、仕事は大きく様変わりすることでしょう。そんな時代を生きる私たちに求められているのは、どんな出来事にも柔軟に対応できる人間ではないでしょうか。「思い込み・先入観・固定観念・偏見」これらのことにとらわれているままでは、何一つ変われないでしょう。

私は、自分の世界から一歩踏み出したことによって、もっと広い視野での物事を見る力、そして自分自身を見つめる力を身につけることができました。みなさんも、自分の世界から一歩、踏み出してみませんか。

考え、行動すると見えるもの

ぐんま国際アカデミー中等部　三年　木村　夏希

地球儀で、インドの南にある小さな国がスリランカだと知ったのは、私が幼い頃です。それは、祖父がスリランカで仕事をしていたためで、我が家へ遊びに来ると、色とりどりのお土産と一緒に、スリランカの話をしてくれたおかげです。なんだか私も楽しくて、興味深く耳を傾けました。そのため、スリランカの長い首都の名前も、小学校入学時には覚えていました。

そのスリランカで、今年の四月二十一日、二〇〇人以上が犠牲となる連続爆破テロが起こりました。このニュースを知った瞬間、祖父は巻き込まれていないか？仕事の方々は大丈夫だろうか？良くないことばかり、私の頭をよぎりました。すぐに祖父に電話をかけ、元気な声を聞いた時は、本当にほっとしました。

しかし、小さいころから知っているスリランカで一瞬にしてたくさんの人の命を奪う悲しい事件が起こったのです。

スリランカは、二十五年以上にもわたる内戦がありました。この内戦は、二〇〇九年に七万人を超える死者を出し、終わりを告げました。それから約一〇年後の今回のテロ事件。スリランカの人々は何を感じ、何を考えているのか……。私には想像することさえできませんでした。まして、中学生の私が、スリランカの人々に何をしてあげられるのか…。自分の無力さを感じました。インターネットで検索しても検索しても、事件のことだけはすぐヒットするのに、自分の納得する答えが見つかりません…。私は、検索するのを止めました。

ふと、一つの考えが浮かびました。

「スリランカの人の生の声を聞いてみたい」

祖父を通して、スリランカの二〇代の女性に電話でインタビュー出来ることになりました。名前はイシャーラ。母国語のシンハラ語の他に、英語、中国語を話す才女です。大学卒業後、少しでも家族を裕福にしたいと、今、日本で研修をしながら日本語を学んでいる努力家でもあります。そんな彼女を前に私は少し不安でした。こんな質問は失礼かな？こんな事を聞いたら悲しませてしまうかな？マイナスな事ばかり考えていました。しかし今回は「中学生らしくなんでも聞いてみよう！」と何か私を後押しする不思議な力が、不安の渦を払拭してくれ、私は電話に向かいました。

私達の共通語は英語。フレンドリーな会話から始まりました。スリランカの事も聞けました。祖父から聞いた通りの素敵な国でした。

そして、今回のテロ事件について質問すると涙ながらにこう答えてくれました。「とてもショックで、スリランカにいない自分がもどかしいの。どういう状況にあるのか、分からない事が多いけど、日本でもらっている研修手当で募金をしている。早くスリランカの幸せな日々を取り戻したい…。」と。彼女は行動に移していました。

私はそんな彼女に「イシャーラの夢や目標って何？」と最後に質問しました。

「普通の暮らしがしたい…。」

これが英語も中国語も堪能な彼女の答えでした。その時、私には彼女にかけてあげる言葉が見つかりませんでした。それと同時に、「普通の暮らし」をすることが、どれほど幸せで、どれほど大変なことなのかを肌で感じました。

今回、考え、行動することで見えたものがありました。イシャーラへのインタビューは、中学生になり、なぜか行動することを躊躇し臆病になる自分に、机上では見つからない「答え」が外にあることを気づかせてくれました。考え、行動すると見えるものがあるのです。何か素晴ら

しいことをしようと焦るのではなく、目の前にある一つ一つのことを考え、行動することが大切なのだと、そう思いました。

「今度、会おうね。」そんな会話で電話を切りました。その時までに、スリランカに幸せな日々が戻っていることを、願っています。

プライド

桐生市立清流中学校　三年　蔡　思慧

「プライドなんか捨てて挑んでみろ。」「自分のプライドを守り通せ。」このような言葉を、みなさんも歌詞やマンガのセリフなどできいたことがあるのではないでしょうか。私は以前から疑問を抱いていました。「プライド」というものを、守るべきだという人と、捨てるべきだという人がいることにです。「プライド」、とどのつまり自信をもち、誇るこころとは、果たして良いものなのでしょうか、悪いものなのでしょうか。

そもそも、「プライド」とは具体的にどのようなものなのかも、私にはよくわかりませんでした。ある経験をするまでは、です。私は小学生のときにバドミントンをはじめました。はじめたばかりの頃は、やる気に満ちあふれていました。毎回の練習に意気揚々と向かい、トレーニングなどにきっちり取り組んでいました。そのおかげか、毎日充実感に包まれていました。でも、そんな高いモチベーションは長くはつづきませんでした。練習に慣れて新鮮さがなくなるにつれ、ちょっと面倒だな、家で遊んでいたいなといった、怠けたいという欲がでてきたのです。一回そう思い始めると、そこからは下降の一途を辿るばかりでした。縄跳びの回数をごまかしたり、ダッシュを全力でやらなかったりと、毎回の練習を少しずつ手を抜いてやるようになってしまいました。そして、ただなんとなく練習を繰り返すうちに、とうとう初めての大会の日を迎えてしまいました。大会特有の熱気、緊張感、そして相手との実力差に圧倒され、手も足も出ないまま負けてしまいました。私は後悔の念にとらわれました。なぜ今まできちんと練習に取り組まなかったのだろう、真面目にやってこなかったのだろう、と。何より、真剣さが無かったせいで、悔しささえも感じないのが、一番情けなかったです。それからは、練習に対する気持ちが一変しました。キツいとき、辛いときは、大会のときに感じた情けなさを思うと、自然と体に力が入りました。すると、徐々にですが、技術も体力も向上していくのを感じました。そうして、二回目の大会が始まりました。またしても緊張で押し潰されそうでしたが、初めての大会のときとは違い、こんな気持ちが心の底から湧いてきたのです。「一生懸命やってきたんだから、きっと大丈夫だ。」という自身が。

今思えば、その自身こそが、プライドだったのだと思います。日々の小さな努力の積み重ねからうまれる自信、それこそが、プライドの正体だったのです。つまり、プライドとは、自分自身の努力によって誰もが勝ち取ることのできる、賞状であり、トロフィーであり、勲章なのです。だから私は、プライドは良いものだと思います。人がよりよく生きていくためには、必要不可欠なものだと考えます。

ではなぜ、冒頭でも述べたように、プライドを捨てるべきものとして見る人がいるのでしょうか。その理由は、「見栄」と「プライド」の混同にあると思います。この二つは、「自信をもち、誇るこころ」という点では共通しています。しかし見栄には、その自信の土台となる努力の積み重ねが無く、表面的なものでしかないのだと思います。中身のない薄っぺらな自信は、少しのことですぐに崩れてしまいます。そんなものは、ただのお荷物にしかならないと思いませんか。それが「見栄」なのです。

「見栄」と「プライド」、両者は似ていますが、心の障害物である見栄と、自らの力で獲得する勲章であるプライドの間には、決定的な隔たりが存在します。だからこそ、「見栄」は捨て、「プライド」は大切に守り育てる

という取捨選択を行うことが、よりよい自分になるためには、必要なのではないでしょうか。

プライドを、つくること、守ること、磨くことは、自分自身を高めることに直結すると思います。私も、自分だけのプライドをたくさん手に入れて、やり切ったな、と思える中学校生活にしていきたいです。

つながる

太田市立尾島中学校　三年　髙橋　愛門

「やられた。」

相手の選手が蹴ったボールが僕の頭上を越えた。走っても、走っても、もうダメかもしれない。そう思ったその時だった。

「バシッ」

ボールを止める強い音。ゴールキーパーのナイスセーブだ。このプレーに何度助けられただろうか。

「ありがとう。」

そう、心の中で叫んだ。

僕は小学生の時からサッカーを続けている。いつも助け合っている大切な仲間もいる。そんな仲間には、いつも心から感謝している。しかし、改めて考えてみると「ありがとう」と直接声に出して伝えてきただろうか。そんな疑問を抱えながら過ごしていたとき、僕はあるおじさんと出会った。

僕の住んでいる町、世良田では、約四百五十年間続いている世良田祇園祭りが毎年行われている。祭りでは食べると病気にかからないといわれる八坂アメが振る舞われる。その八坂アメを作るお手伝いに参加した時のことだ。僕はおじさんに初めて会った時、怖そうな顔の人だな、怒っているのかな、と思った。しかし、おじさんはとても優しく、中学生の僕がお手伝いに参加したことを喜び、

「手伝いに来てくれてありがとう。」

と言ってくれた。おじさんは、他にもたくさんのボランティア活動をしているようだ。話をしているうちに、またお手伝いをしたいと思い、お願いした。

すると、地域の公園でやっているイルミネーションに誘ってくれた。そこで僕たちは、毎晩あたたかい飲み物を無料で配った。顔がいたくなるほど寒い夜も、立っていられないほど風の強い夜も毎晩配り続けた。僕は正直、人が来ないような日はやらなくても良いのではないかと思った。でも、おじさんは一日も休まず、何年間も続けているようだった。さらに話をしていると、おじさんは東日本大震災の時、毎週被災地へ行き、コーヒーや焼きそばを被災者の方々へ届けたそうだ。

お金がもらえるわけでもないのになぜそんなに一生懸命なのか、こんなにもおじさんの心をひきつけるものは何なのか、初めはよくわからなかった。でも僕は夜になるとイルミネーションの公園に通った。いつもならこたつから一歩も出たくないはずの僕が、ご飯を食べるとすぐに自転車をこいで公園に向かった。自分でも不思議だが、いつの間にか夢中になっていた。車も通らない真っ暗な帰り道も全く怖くなく、僕の心の中は日を追うごとに充実感でいっぱいになっていった。

そして、イルミネーションの最終日。いつも見に来てくれた人たちが、

「中学生なのに頑張っているね。」

「こんなに寒いのにいつもありがとう、ありがとう。」

と、笑顔で何度も言ってくれた。その時、僕は気づいた。「ありがとう」と伝えることの大切さに。ありがとうと言ってもらえてとても嬉しかった。寒い日も頑張ってきてよかったと思った。寒さも忘れるようなあたたかい気持ちになった。僕が八坂アメ作りの他にもお手伝いをしてみた

いと思ったのも、おじさんたちからありがとうと言ってもらえたからだと思う。おじさんが毎週被災地へ通ったのも、たくさんの人がありがとうと言ってくれて、喜んでくれるからだと気づくことができた。

どんなに思っていることがあっても、思っているだけではわからない。しかし、「ありがとう」と言葉にして伝えれば、人の心に嬉しさやあたたかさをもたらし、やってよかった、また頑張ろうという気持ちにすることができる。言葉にして伝えれば、こんなにも人の心を動かし、やる気や喜びが生まれる。そして、考えや行動を変えることもできる。言葉にして伝え合えば、お互いが幸せな気持ちになり、心もつながると思う。だからこれからは、たくさんの人からもらったありがとうのバトンを声に出してつないでいきたい。

「ナイスプレー。ありがとう。」